

トルコ出張報告

大島 史（東京外国語大学大学院博士後期課程）

行き先：トルコ共和国イスタンブル

受け入れ先：ベヤズィット国立図書館

目的：オスマン語定期刊行物資料のデジタル化作業

期間：2004年8月24日～9月21日

筆者は2004年8月24日から9月21日の日程でトルコ共和国イスタンブルのベヤズィット国立図書館を訪れた。今回の目的は、昨年度から始められた旧ハック・タールク・ウス図書館所蔵オスマン語定期刊行物史料デジタル化作業の一環として、蔵書の整理状況と目録作成の確認、そしてデジタル化へ向けての機材準備である。

最初に訪れたのが、現地での作業を統括するイスタンブル文化大学教授で、イスタンブル市の文化社会事業部長を兼ねるイスケンデル・パラ氏である。まずパラ氏のオフィスで今回の作業を請け負う図書館助手の一人アブドゥッラーマン氏を紹介された。氏はイスラーム研究センター附属図書館の司書であり、今回のプロジェクトに際してベヤズィット国立図書館に出向して撮影作業を手伝ってくれる予定である。彼の他にベヤズィット図書館からは、同じく司書のムハンメッド氏が助手として参加する。なお彼らは前年度図書館の整理と目録作成を行ってくれたグループでもある。

後日アブドゥッラーマン氏に図書館の隅々まで案内していただいた。詳しくは昨年の新井政美氏の出張報告書を参照されたいが、今回撮影される予定のハック・タールク・ウス図書館の蔵書はすべてベヤズィットの国立図書館に移されている。そしてその蔵書は順番も番号もバラバラのまま收拾のつかない状態であったという。しかし今回書庫を見せていただくと見事に整理がなされ、蔵書がすべて目録としてデータベース化されていた。協定書調印からわずか1年で、荒廃した図書館の目録まで出来上がったというのは素晴らしい成果であろう。トルコ側の助手の方々も、このデジタル化の意義をよく理解しており、非常に丁寧な仕事をして下さっていたことに安心した。

次に日本から用意したデジタルカメラを渡し、デジタル化作業に適したパソコンを購入しなければならない。マシンの性能と作業効率を考えればデスクトップが断然優れているし、トルコ語版のOSを使用することを考慮すると、やはりパソコンは現地で購入せざるをえない。イスタンブルのアジア側の一角に秋葉原を小さくしたようなパソコン専門店街があるので、船で海峡を渡りそこまで足を伸ばすことにした。しかし予算の制限もありなかなか適切なマシンが見つからない。ほぼ1日歩き回って値段交渉の末、なんとか予算内に収まるマシンを見つけることができた。

そこでいよいよ作業場の設置に取りかかる。しかし試写してみるとなかなかうまくいかない。新聞の見



ベヤズィット図書館（旧館正面）

開きにもなると相当な大きさがあるし、それを真上から撮るのは困難な作業である上、微妙な角度がついてしまう。また蛍光灯では明かりも不十分であり、せっかくの高機能のカメラでも撮影された新聞の活字は読みづらく、これではデジタル化の意味がない。そこで助手達は撮影専用の作業台を購入してもらえないかと言う。彼らは私を別の図書館の作業班のところへ案内した。トルコ国内でも近年、貴重な資料が傷む前にデジタル化しておこという動きが出てきており、オスマン朝時代の文書の撮影を行っている図書館がある。そこで撮影専用台を見せてもらう。カメラを固定でき、資料を安定した形で広げられる専用の照明付きの台である。日本と連絡を取った上で早速購入手続きに入った。これが意外に高く2100ユーロもする。トルコではこうした機材が製造されていない、どうしても海外からの輸入になってしまうのである。しかし買わないことには作業ができない。さらに在庫がなくドイツからの取り寄せに4週間かかるということであったので、先に予約していた人をお願いして強引に譲ってもらった。こうして無事に作業場が設置できたため、



目録作成と撮影を担う助手の方々。デジタル化を待つオスマン語資料とともに。



試撮影したオスマン語の新聞

筆者の滞在中に試撮影に入り、撮影のサンプルを持ち帰ることができた。

数々の問題に直面し、時にはトルコ側と日本側の板挟みになり苦勞もしたが、終わってみれば非常に充実していたトルコ滞在であった。図書館の保管状況を見れば、このデジタル化作業は非常に大きな意義を持つものであるし、後の研究者にとっても貴重な一次史料となろう。こうしたプロジェクトに関わられたことを非常に嬉しく思う。最後にデジタル化作業のみならず、筆者個人の研究にまで力になって下さった図書館の助手の方々、パラ氏に心から感謝の意を表したい。彼らと再会できる日が来ることを願いつつ。